

目次

紹巴抄

源氏物語抄	卷第一	(桐壺・帚木)	3
源氏物語抄	卷第二	(うつせみ・夕かほ)	44
源氏物語抄	卷第三	(若むらさき・すゑつむ花)	65
源氏物語抄	卷第四	(もみちの賀・花のえん)	92
源氏物語抄	卷第五	(さかき・花ちる里・すま)	123
源氏物語抄	卷第六	(あかし・みおつくし・よもきふ・関屋)	155
源氏物語抄	卷第七	(絵合・松かせ・うす雲)	187
源氏物語抄	卷第八	(朝かほ・おとめ)	214
源氏物語抄	卷第九	(玉かつら・初子・こてふ・ほたる)	245

源氏物語抄	卷第十	(とこなつ・かゝり火・野分・御ゆき・藤はかま・ 真木柱)	289
源氏物語抄	卷第十一	(梅かへ・藤のうら葉)	338
源氏物語抄	卷第十二	(わかかな上)	358
源氏物語抄	卷第十三	(わかかな下)	393
源氏物語抄	卷第十四	(かしは木・よこ笛・すゝむし)	423
源氏物語抄	卷第十五	(夕霧・御法)	449
源氏物語抄	卷第十六	(まほろし・匂ふ宮・紅梅・竹川)	479
源氏物語抄	卷第十七	(はし姫・椎かもと・あけまき)	515
源氏物語抄	卷第十八	(さわらひ・やとり木)	561
源氏物語抄	卷第十九	(あつま屋・うき船)	593
源氏物語抄	卷第二十	(かけろふ・手ならひ・夢のうき橋)	625
解題			659

紹  
巴  
抄

卷名 桐壺更衣故也

五舎一也 淑景舎桐ヲ壺ノ内ニ被履

源氏君誕生より十二歳迄の事あり 卷の末の詞におとなに成給て後とあり はき木の卷十六才 両卷に籠る也 このたくひ多なり

いつれの御時にか 此発端の辞甚深にしてあまたの理を含めり 先作者を不顯して聞伝たる事を書置たる物にみせ侍り されは卷の終の詞にも其趣みえたり 作者不顯は傍人の難をはさる故也 殊紫式部か比女房にも才ある人おほかりき 其憚もあるにや 書物はつみなきさまにかまへたるなるへし 伊勢集の初詞同レ之 意通する歟 又此辞に一の深意有 秘説也 呀

伊勢物語に同意経にも尔時とあれば其時何と云心也 昔と云は三皇の事も昨日のことも云心也

女御更衣 以上至二位三位也 更衣は女官ノ名也 呀

女御 日本紀 不引共ノ事也 河海ニ委

雄略 天皇七年求二稚媛一吉備上通女為レ女御 是女御の

無三停事一と書けり

時めく 時一字をよめり めくはそへ字也 時に成たるといふ心なるへし 春めく同前

はしめより 更衣女御之中に三品を書けり 上臈はもの

えんしなと大様なる物也 品々を褒貶したる心なるへし 入内を桐更衣よりはやくしたる人の事なり

めさましき 冷眼と書 更衣をめにつかぬやうにしなす也 冷眼と詩に作也

まして 心ある詞也 品く見ゆ 恨をおふ 恨みをおへはくるしきとなり あしかれと思

はぬ山の嶺にたにおふなる物を人のなけきは

あつしく 違例かちなる心也 よはき心にて可レ然後

漢書曰生レ男如レ狼 猶思二其起一 生レ女如レ鼠

恐二其武一

かんたちめうえ人なども もの字にて外様むきまての心

こもれり 公卿殿上人侍臣ハ殿上人也

あひなく ちあきなき也 愛もなき心もあり

目をそはめつゝ 史記曰時人見二郵都一側レ目号二蒼鷹一

正直仁にして貴賤不レ分諫 間むつかしかりて目をそ

初也

漢朝八十一女御アリ 周礼後漢書等見タリ 周礼曰女御叙ニ於王燕寝一以ニ歳時ニ献レ功 又云王者妃百二十

人后一人夫人三人嬪九人世婦廿七人女御八十一人三夫人

夫人論 鄭文註曰夫人如ニ三台一從容 論レ礼 九嬪

掌レ教二四德一 九嬪比二九卿一 九嬪掌二 婦学之法一 以

教二九卿一也 四德謂二婦 德 婦容 婦言 婦功一也

廿七世婦主知喪祭賓ニ容 婦服一也 明三其能服二事人一

後漢書曰以備一内職一 為二后正位一 宮圍同ニ軀 天皇一八

十一女御序ニ于王之燕寝一 御謂ニ進御一 於王ニ也 比二八十一

ノ土皇代記曰桓武天皇女御從三位橘三井子 從四位下

更衣 榮花物語ニハ中少将守領のむすめなと参といへり

近代はおほろけの人の不レ参となり

仁明天皇の御代より初る河海ニ委 便殿更衣居と云々

御衣なとめしかへらるゝ所也 故号レ更衣

呀女官とあり 如何非レ女官歟

更衣強 非ニ奉公一 自然の時参内せり 近代女御は無レ

之 女御代と云て今はある上臈といへり

やんことなき 上臈は思召すことをやみ給はぬ故也

はめてしつとをみな時の人みてさて如レ鷹なると云は

きふき物と云心成へし 去間人にむかひかねてまはゆ

きとなり

もろこしにも 殷紂姐己愛 周幽王褒姒を愛せしより世

乱たるなり

史記曰姐己カ云コトニシタカハスト云事ナシト云々

褒姒燧火ヲ見テ咲シナリ

祇云爰を二段に分てり 楊貴妃のためしもの字妙也

起ヲコリ驕ヲゴリ不レ用

はしたなき 伊勢物語の詞におなし よはきものにつよ

くあたるやうの心也

父大納言 更衣の父也 按察使近代納言兼レ之

よしあるにて 句を切て見るへし 此卷にはにててを書て

みせたる也 陰陽故貴賤共に女をは北方と云々

はかくしき 急度したる時はなり

よりところ 無頼と書

玉のおのこ 玉のをとつゝけたる奇妙なり

みかたちなり 源氏誕生也

いちのみこ 朱雀院御事也